一心寺かわら版

第五十五号　令和四年三月発行

持名山一心寺　検索

兵戈無用ー武器や争いは必要ない

二月二十四日、ロシア軍がウクライナへの侵攻を開始しました。それに対して、一心寺が所属する真宗興正派は声明を出しました。

「私たち真宗興正派は、プーチン大統領によるロシア軍のウクライナ侵攻に対して深く憂慮し、強い懸念を表明します。いかなる武力行使も、核戦力を利用したあからさまな威嚇行為も断じて容認することはできません。

武力行使の先では、多くの尊い命が奪われ、傷つけられ、住むところを追われ、いままさに日常が破壊されています。言葉では言い表せないほどの怒りと恐怖、悲しみを抱えた多くの人々に平和が取り戻されることを切に願うとともに、侵攻の即時停止と、対話と交渉による平和的な解決を強く望みます。

私たちの教団は「人類の幸せと平和に寄与するように努める」ことを為すべきとし、「柔らかな心で、お互いが認め合える幸せを伝えましょう」を実践の一つとしています。

いま世界中を覆っている「力の均衡（バランス・オブ・パワー）」による平和構築を求めるのではなく、利己的な人類の姿を反省し、互いの相違を認めながら、柔らかな心で対話と交渉を続けていく努力こそが、人類の幸せと平和に寄与する真実の行為であることを私たちは信じてやみません。

私たち真宗興正派は、人類の対話と共存を求め、平和を願うすべての人々と共にあることをここに表明します。」

現代にこれほどの戦争が起こるとは思いもよりませんでした。しかし、二十年近く続いたアフガニスタン紛争、イラク戦争など、近年にも武器を手にしての争いは度々勃発しています。

プーチン大統領はなぜこのような暴挙に出たのでしょうか。ウクライナの「非軍事化と非ナチス化」を実現するためと主張しています。具体的には、ドネツク・ルハンスク（略称ドンバス）の二つの州に住むロシア人の安全確保と、ＮＡＴＯの東方拡大とウクライナの加盟阻止が目的のようです。

二〇一四年に親ロシアのヤヌコヴィッチ大統領が失脚。プーチン大統領は、ウクライナは過激派に乗っ取られたと非難し、これを機に、クリミア半島を併合しました。さらに、東部の反政府分離運動を後押しし、この分離派とウクライナ国軍の戦いでは、すでに一万四〇〇〇人が死亡していると言います。

キエフで暫定政権を担ったヤツェニュク首相は、東部においてウクライナ語の使用を進める政策を取り、ロシア語を公用語とするドンバス両州で猛烈な反発が起こりました。

新たに選出されたポロシェンコ大統領は、二〇一四年、二〇一五年と二度にわたり、ドンバス地域の即時停戦を目指して、ロシアと「ミンスク合意」に調印しました。その中には、ウクライナ国家の中に、ドネツクとルハンスクのロシアア人特別区をつくることへの合意もありました。ウクライナの大統領には、国際的なミンスク合意を実施するために必要な施策を行う義務が課せられたわけです。しかし、次のゼレンスキー大統領は、ミンスク合意の全否定から政策を開始しました。

プーチン大統領は、ミンスク合意の不履行に不満を募らせたことでしょう。また、一九九〇年の時点でNATOが「一寸たりとも東へ拡大しない」(当時は旧ソ連の時代で、旧東ドイツを念頭にした発言とも理解されている)との約束を破り、東方に拡大したことへの憤りもあるのでしょう。

このようなプーチン大統領の言い分はあるとしても、他国への侵攻を許すわけにはいきません。それでも、お互いの考え、立場を理解することは、この戦争を終結するために必要不可欠でしょう。

北京オリンピックが終わり、パラリンピックが始まるまでの間に始まったロシアの侵攻。今一度、平和の祭典と言われるオリンピック精神を思い起こしてみましょう。

スノーボード・ビッグエアの岩渕麗楽選手。左手甲を骨折した中で、逆転メダルを狙って女子初の超高難度の大技「トリプルアンダーフリップ(斜め軸の後方三回宙返り)」に挑戦。着地直後にバランスを崩して惜しくも失敗。次の瞬間、各国のライバルたちが駆け寄って抱き合い、健闘を讃えたその光景は、世界中の人々を感動させました。

メダルの獲得競争ではない。これこそオリンピックに謳われている精神を体現した姿でしょう。このように国や民族、宗教が違えども、手を取り合うことはできるはずです。

浄土真宗の聖典『仏説無量寿経』に「兵戈無用」と説かれます。「仏さまの教えに導かれ、世の中は平和に治まり、武器を取って争うことはなくなる」。お浄土はすべてのものが金色に輝く平等な世界です。

それは理想だ、現実は甘くないと言われるかも知れません。しかし、理想を掲げてこそ、現実の歩みが始まるのではないでしょうか。

今回のロシアのウクライナ侵攻に対して、私たちには何もできないかも知れません。それでも、戦争について、平和について考え、ウクライナの方々に心を寄せるだけでも意味があると思います。

最後にもう一つお釈迦さまの言葉（『ダンマパダ』）を。

「この世において、怨みに報いるに怨みをもってすれば、ついに怨みは息（や）むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。」

成し遂げることはできずとも　やり遂げることはできる

十七日間にわたって熱戦が繰り広げられた北京オリンピックが二月二十日に閉幕しました。新型コロナの感染拡大は大丈夫なのか、新疆ウイグル自治区の人権侵害への批判として政治的ボイコットが相次ぐなど、不安要素の多かった今大会。

そんな状況にもかかわらず、奮闘したアスリートは多くの感動を届けてくれました。

スノーボード・ハーフパイプの平野歩夢選手。彼のみが成功した、縦三回転横四回転のトリプルコーク一四四〇。

私も若い頃にスノーボードにはまっていたので、あれほど高く飛ぶ、回すということの難しさ、怖さが少しなりとも分かります。

二回目ですべての技を成功させたにもかかわらず、得点が上がらず二位止まり。最終三回目の滑走では、怒りを力に変えて最高の滑りを披露。その人間離れした大技に興奮しました。

数多くの名場面があった今大会。その中で最も心に残ったのが、スピードスケートの小平奈緒選手の言葉でした。

彼女は前回の平昌オリンピック、五〇〇mで金、一〇〇〇mで銀。まさに向かうところ敵なしの強さでした。

しかし、今回は苦しみの連続。股関節の違和感から不振に陥り、国内で五年ぶりに敗れるなど、限界説までささやかれました。何とか復調し、今季ワールドカップでは表彰台に六度も上がり、自信を取り戻しつつありました。

そんな矢先、一月十五日。大雪の中、歩いて練習に向かう時に足を滑らせてしま

いました。右足首の捻挫。「ああ、やってしまったな」と夢が遠ざかったと感じたそうです。

北京に入っても、スタートで右足が踏ん張れない。そのような状態での五〇〇m、スタート失敗から思うような滑りができず十七位。一〇〇〇mも十位に終わりました。

その結果を受けて、「成し遂げることはできずとも、自分なりにやり遂げることはできたと思っています」、「心も身体も、今ここにあるものは全て使い果たせた」と語りました。

メダル獲得を成し遂げたら賛辞が送られます。しかし、その目標を成し遂げる人はごくわずか。彼女も「カタチには何も残らない五輪」と表現しています。メダルは獲得できませんでしたが、オリンピック二連覇という目標に向かってやるべきことはやってきた。やり遂げたことは見える形にはならない、自分の中にしか残らない。しかし、彼女にとってやり遂げたと納得出来たということは、メダルを取ること以上に大切なことだったのではないでしょうか。

金メダル一つ、銀メダル三つを獲得した高木美帆選手。数日間で短距離から中距離の五種目に挑戦すること自体が前代未聞。

「最後にこうして、自分の全てを出し切ることができたので、もう、このレースで金メダルを取れなくても悔いがないというレースができたことが、すごくうれしかった」との言葉からは、小平選手と同じ思いが感じ取れます。

世界中から注目された羽生結弦選手。三連覇を目指しましたが、ショートプログラムの最初のジャンプで穴にはまって失敗。それでもフリーでは四回転半に挑戦。転倒したものの、初めて四回転半と認定されました。

「努力は報われない」という言葉からは悲しみが伝わってきます。しかし、「今の自分のフィギュアスケートに誇りを持っていられると思えるような四年間だったと思います」との言葉から、小平選手、高木選手と同じく、やり遂げた清々しさを感じました。

成し遂げることは、自分の思い、力だけではできません。ですから、自分ができるのはやり遂げることだけ。これは浄土真宗の考え方につながっているように感じます。この世は縁起、様々な縁によって成り立っています。すべてが思い通りになることはありません。その中で思いを成し遂げるためにできることは自分の力を尽くすことだけ。

浄土往生は阿弥陀さまのはたらきです。お念仏を聞き、称えて、そのはたらきに気づかせていただきます。思い通りにならない人生でも、精一杯やり遂げるだけ、浄土へ生まれて往くのだと。

報恩講報告

一月十二日、新型コロナ第六波のため、今回も住職一人でお勤め。それでも十人ほどのお参りの方々と一緒に正信偈を読誦。今回も法話はお寺の掲示板を使ったミニ法話。早く平常のお勤めができることを願いつつ。